



迹仏

涌出品に云はく「阿逸汝^{あいつ}当に知るべし是の諸の大菩薩、無数劫より^{このかた}来、仏の智慧を修習せり。悉^{ことごと}く是我が所化として、大道心を発こさしむ。此等は是我が子なり。是の世界に^{えし}依止せり」と。玄の七に云はく「六に本説法妙とは経に言はく、此等は我が所化なり、大道心を発さしめ、今皆不退に住すと。我が所化とは、正しく^{これ}是説法なり。大道心を発さしむとは小の説に非ざることを簡ぶなり。此本時の簡説を指す。迹の説には非ざるなり。迹の説多種なり。若し涅槃に依らば」等云云。華嚴經に云はく「寂滅道場に始めて正覺を成ず」と。増一阿含經の十に云はく「仏、^{まかつ}摩竭国の道場の樹下に^{おわ}在したまふ。爾の時に世尊得道してより未だ久しからず」と。浄名經に云はく「始め^{じょうみょう}仏樹に坐して力めて魔を降す」と。大集經に云はく「如来成道したまひてより始めて十六年なり」と。大日經に云はく「我昔^{むかし}道場に坐し四魔を降伏す」と。仁王般若經に云はく「大覺世尊は、先に已に我が為に二十九年」と。無量義經に云はく「我先に道場菩提樹下に端坐すること六年、乃至四十余年」と。法華經の方便品に云はく「我始め道場に坐し樹を觀じ亦経行して、三七日の中に於て是くの如き事を思惟す」と。籤の七に云はく「大乘の融通は華嚴に過ぎたるは無し。経の初めに菩提場に於て始めて正覺を成ずと云へり。故に知んぬ、大小に成を説くは皆近なることを」と。

寿量品に云はく「爾の時に世尊、諸の菩薩の三たび請して止まざることを知ろしめして之に告げて言はく、汝等諦^{のたま}かに聴け、如来の秘密神通の力を。一切世間の天人及び

阿修羅は、皆^{みな}今の釈迦牟尼仏、釈氏の宮を出でて伽耶城^{が やじょう}を去ること遠からず、道場に坐して阿耨多羅三藐三菩提を得たまへりと謂へり。然るに善男子、我^{われ}実に成仏してより已来、無量無辺百千万億那由他劫なり」等云云。文句の九に天台云はく「仏三世に於て等しく三身有り。諸経の中に於て之を秘して伝へず。故に一切世間の天・人・修羅は、今の仏は始めて道場に於て此の三身を得たりと謂へり。故に近に執して遠を疑ふなり」と。

寿量品に云はく「諸の善男子、如来は諸の衆生の小法を樂^{ねが}へる徳薄垢重の者を見ては、是の人の為^{わか}に我少くして出家し阿耨多羅三藐三菩提を得たりと説く。然るに我、実に成仏してより已来久遠なること斯^かくの若^{ごと}し」と。文句の九に云はく「一^{約往}〇二^{約現在}〇三^{約修行}〇四に果門に約せば、近成の小を聞かんと樂ふは、釈氏の宮を出でて始めて菩提を得たりとし、長遠大久の道を聞かんことを欲^{よくぎょう}樂^{ぎょうしょう}せず。故に樂小と言ふ。此等の小心は今日に始まるに非ず。若し先に大を樂^{ねが}はゞば仏即ち始成を説かず。始成を説くことは皆小法を樂^{ねが}ふ者の為なるのみ」と。又云はく「諸の衆生小法を樂^{ねが}ふ者とは所見の機なり。華嚴に云はく、大衆清浄なりと雖も其の余の小法を樂^{ねが}ふ者は、或は疑悔^{ぎげ}を生じ長夜に衰悩せん、此を慙^{あわ}れむが故に黙^{もく}すと。偈に云はく、其の余は久しく行ぜず、智慧未だ明了ならず。識に依つて智に依らず。聞き已はつて憂悔^{うげ}を生じ、彼將に悪道に墮^{まさ}ちんとす。此を念^{おも}ふが故に説かずと。彼の経を案ずるに声聞二乗無し。但久しく行ぜざる者を指して小法を樂^{ねが}へる人と為すのみ。師の云はく、樂小は小乗の人に非ざるなりと。乃ち是近説^{こんせつ}を樂^{ねが}ふ者を小と為すのみ」と。

文句の九に云はく「徳薄とは縁了の二善^{くゆうみれつ}の功用微劣なれば、下の文に諸子幼稚と云ふなり。垢重とは見思未だ除かざるなり」と。記の九に云はく「徳薄垢重とは其の人未だ実教の二因有らざるなり。下の文に諸子幼稚と云ふは、下の医子の譬への文を指す。尚未だ円を聞くに堪^たへず。況んや遠を聞かんをや。見思未除とは且^{けんじみじよ}く譬への中の幼稚の言を消す。定めて未だ遠を知らず」と。玄の一に云はく「厚く善根を殖えて此の頓説^うを感じず」文。籤の一に云はく「一往は総じて別円を以て厚^なと為す」と。

五百問論に云はく「一経の中に本門を以て主と為す」文。又云はく「一代教の中に未だ曾て遠を顯はさず。父母の寿は知らずんばあるべからず。始めて此の中に於て方に遠本を顯はす。乃至但恐る。才一国に当たるも父母の年を知らざれば、失^{ところ}ふ所小と謂ふも辱^{はずか}しむる所至つて大なり。若し父の寿の遠きを知らざれば復^{またふとう}父統の邦に迷^{くに}ふ。徒に才能と謂ふも全く人の子に非ず」と。文句の九に云はく「菩薩に三種有り。下方と他方^{くじゅう}と旧住となり」と。玄義の七に云はく「若し迹因を執して本因と為さば、斯れ迹を知らず亦本^{また}を識らざるなり。天月を識らずして但池月を觀るが如し〇迹を払ひ本を顯はすに即ち本地の因妙を知ること影を撥ひて天を指すが如し。云何ぞ盆に臨んで而も漢^{いかん}を仰^{てん}がざる。嗚呼聳駭若為れぞ道を論ぜんや」と。同七に云はく「若し迹果を執して本果

と為さば、斯迹これを知らず亦本またを識しらざるなり。本より迹を垂るゝは月の水に現ずるが如く、迹を払ひて本を顯まはすは影を撥まひて天を指すが如し。当まさに始成の果は皆是迹果なりと撥まひて久成の果は是本果これなりと指すべし」と。

又云はく「諸土は悉ことごとく迹土なり。一には今仏しよせいの所栖の故に、二には前後修立の故に、三には中間所払ちゆうげんしよほつの故に。若し是本土は今仏の所栖に非ず。今仏の所栖は即ち迹土なり。若し是本土は一土一切土にして、応まさに前後修立し浅深不同なるべからず○迹を執して本と為すは此れ迹を知らず亦本を識らざるなり。今迹を払って本を指す、本時所栖の四土は是本国土妙なり」と。

